

日本泌尿器内視鏡学会第 16 回カールストルツ賞を受賞して

公立大学法人新見公立大学理事長 公文 裕巳

昨年11月に大阪で開催されました第 30 回日本泌尿器内視鏡学会総会において、「我が国ならびに東アジアの泌尿器内視鏡手術の発展と普及に大きく寄与した」として、第 16 回カールストルツ賞を受賞させて頂きました。これも偏に岡山大学泌尿器科教室時代に頂戴致しました同門会の先生方からのご支援とご協力の賜物であると心より感謝を申し上げます。

私にとりまして、Endourology は泌尿器科外科医として最も精力的に取り組んできた領域であり、かつ、旧名称である Endourology・ESWL 学会では平成8年～平成22年までの14年間理事を務め、本カールストルツ賞の創設にも携わったことから、今回の受賞は特に感慨深いものでありました。

私が泌尿器科臨床医としての研修を終えた 1980 年代は、低侵襲性医療を目指す泌尿器科医療の大いなる変革期でありました。経皮的腎碎石術 (PNL)、経尿道的尿管碎石術 (TUL) に加えて、1987 年 4 月に体外衝撃波碎石術 (ESWL) が保険適応となり、尿路結石治療は従来の開腹手術から全く新しい Endourology の時代に突入しました。私は、PNL、TUL の手技をマスターするとともに、関連施設への新規 ESWL の導入に奔走しました。また、私自身の Endourology 領域における新しい取り組みとして、世界に先駆けて「細径軟性尿管鏡による腎出血の内視鏡的診断と治療」を 1987 年より開始しました。当初は尿管口を拡張し、外径 18F のピールアウェイ・シースを留置して尿管鏡を挿入していました。そのため、途中で断念した症例や腎瘻を造設して血管腫を診断・治療した症例などもあり、今考えるとかなり大胆な手法であったと思います。幸運にも、初めて作製した内視鏡ビデオは 1989 年イタリアのジェノアで開催された第 1 回国際 VideoUrology 学会で First prize を受賞し、その後の幸運につながりました。まず、この学会での審査員の一人であったトーマス・ジェファーソン医科大学(フィラデルフィア)の Demetrius Bagley 教授と知り合った縁で、1995 年 1 月から 4 月まで同医科大学に客員教授としての研究留学を受け入れてもらったこと、泌尿器科医にとって Endourology のバイブルともいえるべき A. Smith 教授 (Father of Endourology) の Smith's Textbook of Endourology (St. Louis: Quality Medical publishing, 1996) に、日本人として唯一人 one chapter 執筆の機会をいただいたこと、そして、2013 年より昨年まで教室の谷本竜太先生が臨床泌尿器科医として研鑽をつむ機会をサポートして貰ったことなどが、幸運の連鎖として挙げられます。それに加えて、特発性腎出血症例に対して、今日の進化した細径内視鏡を使用する内視鏡的診断・治療法が、岡山大学のお家芸のひとつとなっていることが、この件に関する最大の幸運であると思っています。

一方、1984 年に PNL(経皮的腎碎石術)を開始しましたが、以来、30 余年の間、周辺機器とそ
の手技に画期的な進展はなかったと思われます。安全に実施するための改良法を 1998 年に発

表しましたが、これも根本的な改良とは言えないものでした。近年のファイバー光学の技術革新による HDIG (High Definition Image Guide) と(株)住田光学ガラスの匠の技である高精度対物レンズの作成技術を基盤に、従来の発想を超えて、経皮的腎瘻作成における「安全で確実な腎杯穿刺とガイドワイヤーの留置」という基本的手技を直視下で実施することを着想しました。泌尿器内視鏡関連の改良に関する長年のパートナーである武井和之氏(武井医科光器製作所)とともに、2012 年からの試行錯誤を経て、見ながら穿刺する超細径スコープを完成させることが出来ました。しかも、その発展型の革新的 PNL 用スコープの応用性に関する初期臨床試験を 2015 年 2 月に実施して、3 月に岡山大学の退任を迎えるという幸運にも恵まれました。その後の臨床応用に関しては、教室において和田耕一郎先生を中心に進められており、2016 年 6 月には超細径ネフロスコープとして HDIG スコープが武井医科光器から発売されました。PNL を開始してから 30 余年、考え続けてきた夢が、科学の進歩や技術革新により、新しいイノベーションとして結実した幸運の事例であり、今後広く活用されることを期待しています。

終わりに、今回のカールストルツ賞受賞の機会に、改めて、同門会の後輩の先生方への声援メッセージとして、「生命の営みにつながる知的好奇心としての夢を持って！」「夢の実現のことを片時も忘れずに考え続けよ！」「夢は諦めない限り夢であり続ける！」を贈りたいと思います。

